聯詩叢書

2

聯詩集

神話

山崎琢水

聯詩社

聯詩集 神話 山崎琢水 聯詩叢書 2

聯詩集

神話

山崎琢水

聯詩叢書

2

聯詩社

詩集

神話

山崎琢水著

序

詩は民族とともにあつて始めて根を持つ。そのかぎり、詩はつねにその泉を民族の神話のうちに求めねばならない。山崎琢水がその最初の詩作の源を神話にさぐつたのは、賢こくも正しかつた。淨らかな泉に汲んだ彼の心はどのやうな花をつけるであらうか。私はその花を樂しく想像することが出來る。琢水は神職の家に人となり、自らいま敎職にあるひと、彼の詩人としての精進は彼の家の職務に豐かな肉づけをあたへ、彼の國民學校に於ける職責に背骨を通すことになるであらうと思ふ。宗敎も敎育も詩と別のものであつてはな

らない。言靈のさきほふ國の敎はまづ言葉を重んずるところから始められねばならない。琢水はいま惠まれた環境の中に居る。君の詩の美しい開花の日も期してまつことができよう。

皇紀二千六百一年晩春　聯詩社にて

佐藤一英

神話

展けし地　騰れる空
光れよ雲　萠えたり葦
泥(ひぢ)燿き水めぐりて
獨神　隱身(かくりみ)の日や

天瓊矛に豫ねし文字
光負ひ神二柱
天翔り虹の浮橋
潜める國　瞳あらず

こほろこほろこほろこほろ
來む日祝(はぎ)ぐふかき瞳よ
青く飛ぶ魚のかげあり
こほろこほろこほろこほろ

慕ひよりめぐり合ふ神
天のみ柱紫に
滴る音　泉と湧けり
朱(あけ)の日の國產む業よ

掟きびし初にあり
わかき苑路還りたり
大神のかむ言ながら
吾があなに善しえ乙女を

くろき焔こずゑきれり
いざなひし尊はあらず
くもれそらよ誓くらし
いろはてしはなの風なり

霞と消ゆ誓ひし文字
かごとばかり涙ながる
髪の匂ひうねる現(うつつ)
かひなく道たどりて闇

黄泉戸喫染みし膚(はだへ)
占(よ)みて解けず運命(さだめ)くらく
黄楊の小櫛わびしうなじ
盡きし縁(えにし)まどふあらし

かざす掌に光と影と
片葉木根や眼ひらく
天照らし國照らし神
生(あ)れたり天地(あめつち)ふたゝび

生み生みて貴(うづ)のみ子得し
み頸玉ゆらゝゆらゝよ
光あつめ光はなつ
美(うま)し國五つ彩雲

愛(かな)し愛し迷ふ道よ
空映えし矛は曇れり
背く言狂ふいかづち
恥は湧けり吹けよ嵐

誓あり天(あめ)の益人(ますひと)
天の河　海に終らず
消えゆく星は消えしめよ
地の果(はたて)　常に明るし

石戸一重契絶えり
修理固成の言依し
いみじくも日は蘇る
汝愛しや足音ふるふ

濡るゝ坂路　微を焚かん
ぬぎぬぎて風にさらしぬ
菅曾すがし光る芽生え
溫む水　岸は匂へり

橋は緣に映り
川底の石は燦く
ためらはず禊の日射し
川の瀨の瀨の中つ瀨や

大直毘神直毘　をを
水上につねに向へり
身内(かぬち)光りさとる劒
ををををを直毘神や

素(あら)き雲よ狂ふほむら
雅き榊あふれ裂けり
荒磯(あり そ)たけり奇しび星よ
明くれを母にあくがる

なをしたひおほきわらんべ
やつかひげほゝけむなさき
なきからすあをきやまなみ
やくもにはゝたつねのくに

いとしきも道に違へば
誘はんすべも絶えたり
神逐ひ逐ひたまへり
生きの別れ草も萎えぬ

みなとよみゆりしやまかは
みゝづらによそひしみこと
みすまるのたまのひかりよ
みづもまたたぎとかゝれり

おとのみのあめのやすかは
おのづからうけひのわざよ
つるぎたまさぎりのあをさ
つぎつぎにあれますかみよ

かむみそはにほひにさけぬ
かくてつみよがへりたり
あまてらすくにのまがわざ
あらしとざしいはとこもる

のりてなほすひかりあふる
とがむるはちりにはあらず
ところあたらあたらしとや
のにみつるおほきてのひら

曉を映す鏡よ
ありとある星をつらねて
青と白さやぐすがしさ
あまてらす神をたたへん

手力の命うるはし
つゝましき手に悔亡ぶ
ためしなき常夜も明けぬ
冷き雲の聲還り

谷に棲み穴に苔むす
八つに離(さか)り頭(かしら)まどふ
手弱女のむなし犠牲(いけにへ)
大刀はいまだ風にあらず

奇び大刀尊と生まる
雲々は光に編まる
さにづらふ乙女の笑みよ
さゝがにの綾なす壽詞

怪しさを裂きて觸れたり
都牟刈の大刀の尊さ
罪はこれ光の影か
妖しさは吾にありたり

生きの罪を爪に放ち
釁(ちぬ)る證(あかし)　神の掟
照る日招く日々を耐えん
いのち荒ぶ行方いのち

いろはにほへと
ちりぬるを

怒あらず水の流れ
玲瓏と飛沫き碎けず
杜撰なり胸の野分や
いとど著(しる)し足の明り

爐邊の烟りのあたゝかさ
さすりつ笑まふ並(ぶ)みゐる手
天井黑くしづもれり
ろれつまはらぬ稚けなさ

柱太し　千木高知り
六合に光りあまねく
奇びなる誓ひ果さん
映ゆる雲向伏す祈り

憎しみつ栞を愛す
素足の丘めくる頁
自然なる砂のこぼるゝ
にびいろの潮の八潮路

焰呼吸(いき)つぐ鑛(あらがね)よ
葦間に光る隱(こも)り沼(ぬ)よ
夜もすがら猛びの鳥よ
穗先ふくらむ土の扉(と)よ

邊にぞ明らむ草死せず
髓ひそかに土にかくる
瑠璃色に海を展きて
遍路の鈴白くこだます

常妻の皺る双手は
葉末ながらに光り澄む
無心の枝に搖れ任す
所を知るや泉湧く

ちぢにあつまるものおもひ
ひたすら落葉焚きつゞく
悔なき天に昇るあり
千五百秋の夜の極

亮々と月に鳴るあり
理を葬る竹の直さよ
夜をこめて窓に點れり
離散する書の輕さよ

ぬかるみになづむ旅人
友どちの聲のしるべに
行潦映すいのちよ
縫うて一筋祕處に住む

縷々としてつゆにけむるよ
よる邊なき髪のほつれよ
よこ山に罪のかさなり
坩堝ひえなみだかはけり

終なき風のめぐれる
涙痕はしみらかゞよふ
ふぶきする落葉の明り
小車に瞳かげろふ

曉の歌

雪に開く梅と住めり
夢に閉づ吹雪の相
床し乙女守るあかし
湯浴み膚香を映す

時を白くきみは歩む
ときて流す髪の行方
遠き薔薇沈めるかげ
燭す灯しひとり守る

日に透き散りゆく病葉(わくらば)
祕めたり蟲の音　草叢
開けよ黄昏白き手
飛泉は虚空に懸れり

石叫びて崩えたる樹根(きね)
色彩(いろ)あらたに明けゆく空
いと遙けし宴(うたげ)の群れ
いみこもれる乙女の火よ

時計流れ波に黑く
とけし水脈(みを)は雲と紛ふ
ともし胸は風に鳴りて
問(とひ)よすべて空に虚(むな)し

氷雨さやか樹々を照らす
霰嚙みて風とならん
ひらけ窗よ森のあした
跡もなし前に飛ぶ鳥

風に芽吹く榛の林
語る思ひ通ふ火照り
かそけかそけ草の萠ゆる
貝の耳は透きて紅し

愛する人は霧となり
明烏墓を啄む
天の河行方は消えぬ
明くるを知らず背の翳り

革袋ふるく酒無し
川床に石は飢えたり
斫ける人に影はあらず
神に鞭はひとり鳴れり

そがひに住めり風よ
花ある言(こと)褪せ盡しぬ
放てる鳥聲枯れたり
空なる老木割りし芽よ

山の端に暮れも行く風
石光り雲に失せたり
やませに枯れし草の唄
闇に匂へり岩清水

からまつは雪に痩せたり
語るなく歩める僧に
還すなき日日の火(ほ)めきよ
かくて行く衣を脱ぎて

あめあしにかげのうすれよ
あらくれのみちのながさよ
あまがへるくくとなけとよ
あかきべにせめてはけとよ

あこがれのをかはくもれり
あめうしのちぶさかれたり
あしあとのけむるののとり
あはすてにうつろかせあり

あしためざむこころしぐれ
あかずとびらひとみぬれて
あえてともすあかしそむく
あゆむあすはながれとざす

曉の歌（一）

明らけき火は走りたり
あすならう花咲く垣根
朝雲は虹と懸りて
あかぎれし手も和みたり

曉の歌（二）

朝霞梢を昇り
天の琴風に祕めり
朝露に鹿は覺めたり
天の際しみら明けたり

曉の歌（三）

闇に溶け眠る白鳥
山峽（かひ）病みたり籟（らい）莫し
星移り東雲光り
八つの泉よみがへりぬ

曉の歌（四）

曉の空はなづめり
あらはなる時雨の歎き
あられなき女の祈り
洗髪落葉にうづむ

燃えない詩

うたびとは闇にまづしく
うつゝ世の苑はにぎはし
つゞれ火はあかしとならず
うたかたに詩をささげぬ

白樺

雪を割り雪を白樺
芹の萠え芹のかそけさ
逝かんもの流れ泡沫
夢にさめ夢によきひと

神燈 ——伊勢にて——

古き歴史けむる樹の間
吹雪して來りし我よ
伏し拜む神燈尊と
踏み越えむ醜の骸を

瞳

燭すなく星はあせたり
滿ちあふる池は盲ひぬ
道流れ行手閉ざせり
常夜往く瞳は湧きぬ

老年

糸を垂れて花葩釣つた
いつかの池に白い雲
知らぬ間に越えてゐた峰
靜かに梢搖れてゐる

嬰兒

嬰兒は籠に眠りて
母が魂(たま)空に翔けたり
滿つる思ひ窓にはためき
はしけやし眠り覺めたり

鴉

黑く空と畫く鴉
雲を吐きて木梢(こぬれ)幽(かす)し
草に露に湧きし夜よ
暮れし胸みなぎる聲よ

影

盡に翳る影あり
いささかの唄の草花
さかしらに人は言問ふ
射よ視よ曠野光る果

五つ指

五つ指何を思へる
天を支へ祈る人ら
雲に乘り彩なす虹よ
いつくしき痩せし紅指

薔薇

東雲は窓に光りて
白き薔薇部屋を満しぬ
静かなる吐息を聞けり
眞實に去りし しものを

まつり

刃鋭く貫き透せ
造り花指に匂はず
血潮醸み我を祀らん
山々に神は光れり

わかれ

わかれ路にはやも着きたり
アカシヤの梢あらはに
若きひと滿月を指したり
あえかなる目ぶた紅らみ

行方

燈火はきよら明るし
花降る粧ひ冴えし眉
はつかにも祕めし寫し繪
とめどなき行方に任す

白き馬

氷雨降りて額(ぬか)は涙し
開かれず無韻の扉
沈み崩るひとりの道
白き馬我を翔けたり

生誕

天地の闇くる刧(はじめ)初
葦かびの光れる渚
展けし距(の)離(り)湧きし時(と)間(き)よ
あたら世や神生れましぬ

家系

髮白く家を傳へて
神の座近き父母
翼空に埋め我よ
髮を嚙み疾風に曝す

跋

神話を無視した日本の歴史は意味をなさない、また歴史なくしては「私」は存在し得ない。私はしんじつ生きる道を神話に求めた。求め、詩作することによつて私は生きた。

「神話」は私自身への戰の記錄であり亦、神ながらの大道にふれん爲の努力である。

この貧しい記錄がいさゝかの人にでも眼に觸れ心にむかへられるなら幸である。

× ×

この聯詩集が日の目を見るためいたゞいた佐藤一英先生の過分の御厚意をこゝろから嬉しく感謝いたします。

昭和十六年五月二十三日

山崎琢水

作品目次

神話 1　いろはにほへとちりぬるを 31　曉の歌 45
燃えない詩 65　白樺 66　神燈 67　瞳 68　老年 69
嬰兒 70　影 72　五つ指 73　薔薇 47　わかれ 76
行方 77　白き馬 78　家系 80

聯詩叢書發刊について

日本の詩歌史は古い。その源は伊邪那岐、伊邪那美、二柱の神の唱和に、もとめられる。その後、長歌が生れ、短歌が生れ、連歌が生れ、俳句が生れ數千年を經た今日ではいづれが正しく本流となすものかも見分けがたいまでに、千海あふれ、百川交り、千紫亂れ、萬紅散るありさまである。一見詩歌の榮えはきはまるかの感がある。まさしくそれは詩歌の光榮であるか。われらはこの現象に深い疑ひをいだかずにはをれない。

われらの詩歌の源泉は岐美二神の唱和にあるといつたが、この心はその後の詩歌の上にまちがひなく傳承されたか、そのことは新らしく批判を要するところである。大和に發して、江戸に終る千數百年の詩史はしばらくおくとしても、明治以後今日にいたる七八十年間の詩歌を見るに、この源泉を發した水は濁りに濁つたといふことができる。いふところの主我主義自由主義の西歐思潮は明治におこつた新體詩をその毒で穢したばかりではなく、傳統の詩――短歌や俳句の上にも蝕みを廣げた。その害毒が極度に達したとき、支

那事變は起り、世界動亂はまきあがつたのである。いま心ある詩人はこの事によつて眼覺め、新らしく詩の本道を求めつゝある。しかもその道はたやすく見出せず、いたづらに右往左往するもののごとくである。

かういふ現狀にあつて、詩歌の光榮をいふことはできない。詩歌の光榮は眞正の日本の詩心がこの國土の上に燦然と輝やくときにのみ言ひ得るのである。眞正の日本の詩心は岐美二神の唱和にもとめねばならない。新らしい詩學は世界の新秩序の顯現を願望する日本が建てねばならぬものである。しかしながらその新詩學も日本の眞正の詩心によらずしてはいたづらごとである。いな西洋新詩學もすでに行づまり沒落しようとしてゐるとき、世界におこるべき新詩學は、日本の詩心を外にしては立ち得ないと言ひ得るのである。

岐美二神の唱和こそ、世界詩の上に指針を示す詩學の基本とならねばならぬのである。これこそ生命の創造をつかさどり、生命の永遠をまもる大和の精神である。二神の唱和によつてなされた詩の韻は、二つの偉いなるたましひの調和によつて、生々潑溌の伊吹を傳へる。われらの神話はその最初の一行において、「むすび」が大和と創造の不可離の原理を表はすことを語つてゐる。岐美二神の唱和の韻もこの原理から發するものである。

われらの思ひをいたさればならぬのは、ここである。民族の原初に發せられた韻は今日の詩人によつてきかれねばならない。そして、反省されねばならない。われら聯詩人がかしこみ聽くのはこの韻であり、この韻に思ひをいたすことによつて、新らしい詩學を考へるのである。日本詩歌の黄金期とまで考へられてゐる現代にあつて、それに抗議し、新しい詩學を示し、新らしい時代の詩をおくりいださうとする所以は、現代がこの章むべき古心を忘れてゐるからに外ならない。

聯詩人は詩によつて一億の國民が結合し、新らしい創造の道に踏みいだすその原理と方法とを示し、その實踐をすべく立つてゐるのである。聯詩人は民族の原初の神々の御聲をきき、身に體して行ひ、その聲を千萬年の後に傳へるべく立ちあがつたのである。聯詩人は「まこと」を發現し、「つとめ」を躬行し、上御一人に歸一しまつる道を詩の上に見出したのである。聯詩人は眞の大和創造がいかなるものであるかを世界の人々に示すために立ちあがつたのである。

國に一朝急あるときは、國民すべてが劍をとつて立つのがわが國古來からの國民精神である。それとともに戰の庭にあつても一篇の詩句を口づさむだ

けの餘裕と優美とを持てるものが日本國民である。「大君の邊にこそ死なめ。」この詩句は千數百年前の日本の詩人であり武人であるもののしるした言葉であるが、その詩句は以前から國民の胸にひびいてゐる句であるとともに、その後絶えず國民に口づさまれた句である。聯詩人が口づさむのもまたこの句である。

國民すべてが武　として立ち、國民すべてが詩人として立ち得る國は幸ひなるかな。それは惟神の國においてのみあり得ることである。聯詩人らが、「遠々吾等大祖神」と唱へつゝ戰場に立ち向ふのも、われらの幸ひを思ひ肇國の神々に感謝する心からである。「大君の邊にこそ死なめ」と「遠々吾等大祖神」とは一體にして不二である。

「遠々吾等大祖神」と唱へ「大君の邊にこそ死なめ」と歌ふことは、日本人として、必然の聲であり、それは詩技をわきまへぬものもなし得ることである。しかもこれらの讃唱歌唱があつて一億一心は實現し、われらが國土は始めて安泰であり、大君の御代は八千代に榮ゆるのである。

聯詩人の詩學はかくして形成されつゝある。――國民誰しもが口づさまればならぬ、また口づさみ得る十二音句は、大初よりひびいてゐる韻に導かれ

て、開發され、結合されて詩をなすのである。自我を超脱することによつて私心を捨てることによつて、言靈の働らきはすべての國民を詩人とするのである。そは大君に歸一しまつるまごころによつて日本の生成發展をなすつとめが果されるごとく、大祖神の唱和の韻に歸一するまことの詩心によつて、日本の詩の榮えを來さすことができるのである。

因にこの叢書の裏表紙の中央に入れた紋章は太陽十字章と呼び、聯を表徴するものである。白地に赤のこのしるしは「日のもとに結ばれてあるより強きものなし。さらに榮えあるものなし。」といふ觀念を表はすものであつてまた日本思想の根元の觀念をあらためて指し示すものである。われわれは、聯を思想的に言ふとき、簡明に「日のむすび」といふ言葉を用ひてある。詩人は言葉を正すものでなければならない。儒教佛教基教などにその觀念が濁らされた現代日本語は、ひとたび古代に立ちかへることによつてのみ純正になし得るのである。

皇紀二千六百一年秋

聯詩社出版部

昭和十六年九月十日印刷
昭和十六年九月十五日發行

聯詩叢書 2

神話

定價九十錢

著者 山崎琢水

東京市豐島區長崎町三丁目二十番地
發行者 佐藤一英

東京市豐島區千早町一丁目四十三番地
印刷者 二谷陸治

發行所 東京市豐島區長崎町三ノ二〇 聯詩社

振替東京一六三、一五三番

聯詩叢書

島田謹二郎 菊半截 裝幀 版

1 聯詩集 大和路 佐藤一英

2 聯詩集 神話 山崎琢水 ¥.90 〒.10

3 詩論 聯の詩學 佐藤一英

4 聯詩集 三人集 島泉羽茂 村潤三 三達麿

5 聯詩集 葦の風景 高木斐瑳雄 近刊

6 聯詩集 椿の宮 一戸玲太郎

7 聯詩集 陽・死・火 保永貞夫

以下續刊

發行 聯詩社 東京市豐島區長崎三ノ二〇 振替東京一六三一五三番

聯詩叢書

島田謹二郎 菊半截版 裝幀

1 聯詩集 大和路 佐藤一英

2 聯詩集 神話 山崎琢水 ¥.90 〒.10

3 詩論 聯の詩學 佐藤一英

4 聯詩集 三人集 島羽茂 泉潤三 村達麿

5 聯詩集 葦の風景 高木斐瑳雄 近刊

6 聯詩集 椿の宮 一戸玲太郎

7 聯詩集 陽・死・火 保永貞夫

以下續刊

發行 聯詩社 東京市豐島區長崎三ノ二〇 振替東京一六三一五三番